

国際交流学習とメディアリテラシー

メディアリテラシー教育開発研究会^⑩

関西大学教授

久保田 賢 一

1 海外との交流学習

インターネットがブロードバンド化してきたことで、電子メールだけでなく、チャットや電子掲示板 (BBS)、テレビ会議などコミュニケーションのために活用できるツールが広がってきた。学校教育においても教室の中の活動だけでなく、教室の外にもコミュニケーションの輪を広げ、外部の専門家や他の学校とインターネットを介して交流や意見交換をするようになってきた。

離れた地域の学校と交流をすることは、本で学んだことよりも現実感があり、その地域に対する親しみも増してくる。また、テレビ会議はリアルタイムの交流であり、発表する力も身につけることができる。このような活動を海外にまで広げることができれば、さらに多様な教育活動を展開できるだろう。海外との交流学習を支援する団体にはいくつかある。たとえば、ブリティッシュカウンシルは、英国と日本の学校を結ぶ「モンタージュ・ジャパン¹⁾」というウェブサイトを立ち上げ、インターネットを通じて日英の学校が交流するための支援をしている。グローバルプロジェクト推進機構 (JEARN)²⁾ は、防災プロジェクト学習やティディベアプロジェクトなど、さまざまな国の学校との交流を支援している。

私の研究室でも、アジアをはじめとする途上国と交流する学校を支援している。マスメディアか

ら送られる途上国の情報は、「貧困」や「紛争」など負の側面が多い。それを視聴した子どもたちは、途上国に対して「貧しい」「かわいそう」というステレオタイプの感情を抱きがちである。しかし、交流学習ではインターネットを使い、途上国に住んでいる人たちからマスメディアとは違う情報を受け取れるので、多角的な視点から情報について考える力を育てることができる。まだ十分にインターネット基盤が整備されていない途上国も多いので、先進国との交流と比べ困難な点が多いが、メディアリテラシーの観点からアジアの国々との交流は意義が深いと思う。私の研究室が支援しているいくつかの活動を紹介しよう。

2 海外ボランティアとの交流³⁾

小学校から高校まで6校が参加し、現在、途上国で活動をしている海外ボランティアと電子メールの交換する交流である。海外との交流というと英語を使わなければならないという思いが強く、どうしても敬遠してしまいがちになるが、海外ボランティアと日本語で交流できるので比較的容易に参加できる。たとえば大阪府高槻市立三箇牧小学校⁴⁾では、6年生の総合学習で交流学習を行っている。まず『ユニセフBOOK』『世界がもし100人の村だったら』『忘れられた子どもたち』などの本やビデオを活用し、世界のことを学ぶ。次に、ホンジュラ



写真1・テレビ会議で日本文化を説明する



写真2・キャンパスに向かって絵を描いているパレスチナの生徒



写真3・絵を完成させた日本の生徒

ス、バングラディッシュなど12か国についてグループ別に海外ボランティアとメール交換し、それらの国の文化や社会について学ぶ。生徒はそれらの国が地球の何処にあるか最初はわからないが、交流を深めるにつれて知識が増え、親しみが増していく。最後に、ボランティアとの交流で得た情報を交え、それぞれ担当した国の様子を発表する。

3 共同で1枚の絵を描く

パレスチナ難民キャンプの学校と共同で絵を描く交流である。参加校のひとつ石川県金沢市立扇台小学校の実践では、まず電子掲示板やテレビ会議などを使って下絵に関する話し合いを行った。その結果、互いに相手の文化を学び(写真1)、祭りや民族衣装など相手の文化に関する絵を描くことになった。下絵が完成すると、8月にはパレスチナ側で絵の制作が始まり、それに合わせて実際に指導に携わる二人の教師がシリアを訪問した。教師はパレスチナの生徒たちと交流し、その様子をテレビ会議で日本の生徒に紹介した。パレスチナの生徒と一緒に日本の教師が画面の向こうから話してきたことに、日本の生徒は刺激をうけた。パレスチナ側でキャンパスの半分を制作し(写真2)、10月には日本の子どもたちが完成させた(写真3)。

4 韓国の学校とディベート

大阪府寝屋川市立北小学校と韓国の学校とディベートによる交流である。「小学生がアクセサリをつけるのは望ましいか?」「電車の中で老人が立っていたら席を譲るべきか?」といったテーマについてそれぞれの学校でディベートを行う。話し合った内容を交換し、自分たちのディベート

の内容と比較し気づいた点を整理する。そして、話し合ったことをもとに自動翻訳ソフト付きのチャットで意見交換をする。韓国語は日本語と文法が似ているので、わかりやすい日本語を使えば翻訳ソフトだけでも十分に話し合うことができる。

ディベートを行うには、両国の教員間の準備が大切になる。韓国語のできる学生が間に入り、毎週テレビ会議で進み具合を調整し、活動を進めている。インターネット環境もディベートに関する生徒の知識・技能も韓国のほうが進んでいるため、日本側は相手に合わせるのに苦心している。

5 APECウェブサイト⁶⁾

APECサイバーアカデミーというウェブサイトでは、台湾、フィリピン、韓国の学校が参加し、英語で協調学習を行っている。英語を使用しなければならないため、日本からの参加校はまだないが、関西大学の学生が試験的に参加し、日本の学校が参加できる可能性を調査している。このサイトでの活動は3か月間の期間限定で、ホームページを作成したり、テレビ会議で交流をしたりする。

協調学習で、生徒は「コンビニエンスストア」「私たちの休日」「お金」など5つのテーマから自分の好きなものを選び、そのテーマに関してのアンケートやインタビューをして調査する。それをウェブページにアップし、互いに各国の違いなどを比較したり、意見交換したりする。ID、パスワードともguestでログインできるので、関心のある人はぜひ見学してもらいたい。

6 メディアリテラシーの観点から

国や地域によってはインターネットへのアクセ

スが難しく、生徒同士が直接インターネットを使ったコミュニケーションをできない場合もある。しかし、アジアの国との交流は、グローバルな視点で物事を捉える力がつくだけでなく、メディアリテラシーの育成にも効果的である。

(1) マスメディアによるステレオタイプ

海外の情報はテレビや新聞などのマスメディアからのものが多い。マスメディアによる情報は、災害や紛争などの事件が多いため、途上国に対するものの見方が固定化されてくる。ところが実際にそこに住んでいる人からメールを受け取り、現地の様子を聞くと、これまでのイメージとは違う世界が浮き彫りになる。

(2) デジタル・デバインド

インターネットが発達してきたといっても、それは先進国が中心で、開発途上国ではまだまだ普及が遅れている。途上国の中でも都市部に比べ、農村部ではなかなかアクセスできない。そのため途上国の農村部との交流は、インターネットよりも郵便のほうがやりやすかったりする。電子メールの返事がなかなか来なかったりするの、停電が多かったり、町に出ないとインターネットを利用できなかったりするからだ。インターネット環境は何処も日本のように便利ではないということを理解するのも大切である。途上国の学校との交流は、不便さを乗り越えて行うことに意義がある。

(3) メディアを介したコミュニケーションのあり方

インターネットを使うと、生徒は安易な質問をしがちである。交流の相手に「どんな食べ物がありますか」「どんな観光地がありますか」と問いかけるが、相手からは「まず、自分で調べてみてください。そのうえで質問を考えましょう」という返事が来たりする。生徒はこういうやりとりの中で適切なコミュニケーションを学ぶ。対面でない相手とのコミュニケーションは、相手が見えない分、自己中心になりがちである。しかし、双方向のコミュニケーションを続ける中で、交流のマナーを学んでいく。加えて、ウェブページの検索、編集の技術も交流活動の過程で身につけていく。

(4) テレビ会議によるコミュニケーション

テレビ会議では、モニターを介してリアルタイムの対話をする。音声聞きづらかったり画像が

きれいでなかったりすることもあるが、基本は対面と一緒である。初めは緊張して話ができない生徒も、回を重ねるにつれて次第に要領を身につける。相手が外国人の場合、外国語を使うもどかしさはあるものの、目の前の相手に対して必死で伝えようと工夫をする。ただ暗記した英語を棒読みにするのではなく、具体的なものを手に持ち、それを使って語りかけるのはわかりやすい表現手法のひとつである。伝えるための工夫をいろいろ考えることで、メディアリテラシーが向上する。

7 乗り越えなければならないハードル

国内の交流と違い、海外と交流を始めるのは学校単独では難しい。初めての交流では、何をどうやったらよいか教師自身も具体的なイメージが掴めない。そこで最初は、大がかりに実施せず小規模で試験的に行ってみる。うまくいくようだったら少しずつ規模を拡大することを勧めている。

交流でまず越えなくてはならないハードルは「言葉」である。何語を使って交流をするか、その言葉を使える人材を確保できるかによって交流のスタイルも変わってくるからだ。私の研究室には韓国語、中国語、アラビア語を話す学生がいるので、これらの言葉を話す国との交流には彼らに仲介役を担ってもらおう。そのほかの国とは英語でコミュニケーションをとらなければならない。学校に英語のできる先生がいれば、なるべく自前でやるようにすると交流学習のノウハウが身につく。

次に、越えなければならないハードルは、交流をデザインすることである。電子メールやテレビ会議をどう組み合わせるか、交流のテーマをどう設定するか、少しずつ盛り上げながら活動を継続するには何処に学習活動の山を持ってくるか、支援の学生は教師と一緒に計画を立てる。ほかの学校の活動と比較しながら、それぞれの学校の状況に合わせたデザインを考えるには、これまでの実践で蓄えられたノウハウが役に立つ。

8 学習目標の設定

交流をデザインするには、学習目標の合意がま

ず必要である。国内の学校との交流学习であれば、全国同じカリキュラムで学習しているので、比較的目標を設定しやすいが、海外とやる場合は相手校との目標のすり合わせに苦勞する。なぜなら国によって文化・社会状況が違うだけでなく、学期が始まる時期やカリキュラムが違うためである。さらに相手が途上国の場合は、学校ではインターネットにアクセスできなかつたりする場合が多いため、交流の回数は少なくなってしまう。それを補うには、交流に向けてそれぞれの学校内での活動をうまくデザインする必要がある。パレスチナ難民との交流では、テレビ会議で下絵についての話し合いをしたあとは、実際にキャンパスに絵を描くことが活動の中心となる。テレビ会議をイベント的に活用することで、相手のことをイメージしながら、それぞれ活動を進めることができる。それには、テレビ会議のイベントに向けて生徒の意欲を盛り立てる授業のデザインが重要になってくる。

韓国の学校は、日本よりもインターネット環境が整い、教育レベルも高いため、生徒はパソコン習熟度も知識・技能の修得度も高い。一昨年は、掲示板を使って、それぞれの国の「食べ物」を紹介したが、韓国側は活動レベルが低いと不満が残った。昨年は韓国側から高い目標を求めてきた。一方、日本の学校は交流の経験も少なく、ディベート学習も初めてである。ディベートで議論した内容を見ると、その差は歴然とわかる。海外との交流学习は、おかれている状況が違うため、双方が満足のいく目標設定をすることは難しい。しかし、双方向のコミュニケーションを通して、目標を設定していく過程も交流学习の醍醐味のひとつである。教師にも異文化を理解し、交流相手と楽しみながら対話を重ねていく力がほしい。

9 課題と展望

海外との交流学习が盛んになってきたといっても、まだまだ国内のそれと比べ、乗り越えなければならぬ課題は多い。まずは自分たちの希望に合った交流相手を探すことが大変だ。初めての場合は既存の交流プロジェクトに参加し、交流のノ

ウハウを身につけることから始めるのが良いだろう。交流プロジェクトに参加することで、相手校を紹介してもらったり、通訳をつけてもらったりするなどいろいろな支援を受けることができる。

海外との交流学习では、英語の学習やその国の理解だけでなく、異文化の人とのコミュニケーションやメディアリテラシーなど多様な学習が期待できる。そして、実際に海外にいる相手とのメディアを介した交流は、子どもたちの心に長く残る学習体験になるだろう。

メディアを介してだけでなく、できるならば実際に対面できる機会も用意できると、その効果は倍増する。日本福祉大学が毎年開催しているワールド・ユース・ミーティングでは、日本国内だけでなく海外からも生徒が参加し、英語による対面の交流を行う。事前に調査をした内容をまとめ、発表し合ったり、ホームステイをしたりして、交流を深めている。8月に行う発表会前には、メディアを介して協調学習を行い、発表会後には活動の成果をまとめる1年間のカリキュラムが構成されている。バーチャルな関係だけだと現実味に欠ける場合があるので、できたら対面とメディアを組み合わせた交流をデザインすると学習効果が高まる。

アジアの国との交流学习では、メディアリテラシーの学習が埋め込まれている。異文化理解や国際理解の学習に加え、メディアをどう活用していくか生徒自身が工夫することにより、より大きな学習効果が期待できる。ほんものの相手との交流では、自分の思いを伝えたいという強い気持ちを持つようになり、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲が生まれてくる。もっと多くの学校で、アジアの国との交流学习を推進してもらいたいと思う。

参考URL

- 1) <http://www.britishcouncil.org/jp/montagejapan-about.htm>
- 2) <http://www.jearn.jp/japan/>
- 3) <http://www.med.kutc.kansai-u.ac.jp/~meetg/>
- 4) http://www.takatsuki-osk.ed.jp/sangamaki/2003_MTG/nikki2006/fiji.html
- 5) <http://artmile.ict-education.org/index.html>
- 6) <http://linc.hinet.net/apec/login/login.asp>